

八幡竈門神社の仮面について (2)

小 野 一 郎

The Study of the Mask in "Hachiman Kamado Shrine" (2)

By Ichirō Ono

指導 東京芸術大学名誉教授

西田 正秋

I 抄 録

八幡竈門神社蔵の木彫仮面については、既に本学研究紀要第7巻に発表したが、同神社蔵の今一つの木彫仮面について、民俗学的諸問題には触れずに、人体美学の立場から計測・観察し、顔面表情の美的効果の考察への基礎資料としたものである。

II 序 言

八幡竈門神社蔵の木彫仮面で、社伝で『舞楽面』と称されている、着面使用したと思われる仮面について、人体美学の立場に立って、その顔面表情の美的効果を考察し、郷土の仮面造形の造形的・美術的研究の一基礎資料としたものである。

III 観 察

(1) 八幡竈門神社の仮面について

- (a) 所在 大分県別府市内竈
- (b) 所蔵 八幡竈門神社
- (c) 名称 不明 (社伝によれば舞楽面)
- (d) 作者 不明
- (e) 時代 不明
- (f) 由来 不明
- (g) 彩色 なし (現在)
- (h) 材質 桐材
- (i) 重量 250g
- (j) 寸法 縦径232mm. × 横径148mm. × 厚み3~8mm.
(その他、各部分の寸法は計測値一覧表参照のこと)

(2) 八幡竈門神社について (縁起書抜萃)

仁徳天皇之時有勅日、後豊州速見郡竈門荘 龜山者、日本武命及神功皇后西征之時、造 行宮 徴兵之地、宜 崇敬潔祀、於是如降三十三神既国常立尊、天照大御神

田心姫命湍津姫命市杵島姫命素盞雄祀天忍穗耳命天穗日命活津彦根命天津彦根命櫛樟日命底筒男命中筒男命表筒男命天兒屋根命天太王命武甕槌命建御名方命官實姫命大山祇命加茂別雷命大山咋命経津主命天照大御神荒魂丹生都姫命麩坂皇子忍熊皇子豊姫命金山彦命称日。聖武天皇神亀四年丁卯三月十五日仲哀天皇、応神天皇靈從 豊前菟狭 降 臨于竈門荘宝城峰、此日於 山麓 見 一白髮老翁、長丈余、髭鬚二尺許、状貌異常自称 大神比義、諸男及土人迎祭 二神于尾興峰、既而降 臨龜山、懸 桜樹枝上 (今時三月十五日称桜会祭蓋始于此、) 忽變為 白髮老翁、威靈赫々不 可 仰諸男命畏伏敬拜、深念黙禱者三日、夜時有冥託、於 是始配 竈門宮、祭 于殿中央 嵯峨天皇時藤百合稚、献 九町八反 以為 祀田、淳和天皇天長三年丙午三月十五日迎 神功皇后神靈於菟狭 又配焉、遂称 竈門八幡宮、此時置 社僧、神宮寺末寺長福寺・光明寺・自応寺・他応寺・観音寺・養徳寺皆真言宗也、自 宇佐坊中 来八月十四日放生会三日二夜、此祭七坊共行 之、建久七年丙辰大友左近将監源能直受 封豊後、崇 信此神、祀田尚如 元、正治元年巳未復 祀田九町八反、(此謂 祀田、蓋先 是臺西所 奪、然今不 可 考) 大興 東浜行幸儀 (東浜今二本松是也) 其八幡大神輿三及三十三神々輿一云、明德二年辛未三月初属 神祇伯白川殿、天正十九年辛卯大友氏没 収祀田、於 是東浜行幸儀寝、元和元年乙卯六坊壊廢、独神宮寺存焉、同元年五月豊前小倉城主細川氏所領之時憂 本社衰頽、復 于舊領往昔、隸 此祠 以奉 祭祀之民戸 不 詳 幾何、相伝以為 竈門一荘 矣、(蓋係 竈門荘 為 九村、竈門野田小坂古市龜川平田北鉄輪南鉄輪小浦) 而中古以降奉祀者五村、日内竈門野田古市龜川平田及鉄輪、大井手川以北附焉、毎年祭祀二月十五日、三月十五日、六月廿九日、十月十五日、十一月初卯日、明治四十年改正二月廿三日祈年祭、

四月十五日例祭、七月廿九日夏祭、十一月十五日秋祭、十一月廿六日新嘗祭、十二月十五日冬祭其他一日、十五日、月次祭執行、寛延三年庚午扁額磨滅亀川莊屋高橋奥右衛門神祇伯請于雅富王更時之、古文書古器物遇。大友氏之乱。概焼燼云。

(3) 形体について

社伝では『舞楽面』と称されているが、現存する種々の代表的舞楽面を見る時、どの種類に属させたらよいかとまどうような、一見素朴な顔面表情の仮面である。因みに正統に伝えられている舞楽面のあれこれと比較してみると、額の皺の *curve* は二ノ舞(咲面)〔手向山神社蔵〕・二ノ舞(腫面)〔巖島神社蔵〕に似ており、口角を強くへの字にまげている表現は、胡飲酒〔手向山神社蔵〕・皇仁庭〔春日大社蔵〕に近いが、これらの仮面のように上唇・下唇が明確に表現されていない。勿論時代的或は地域的に変形して、この表現に至ったのであろうが、明かに何面からの変形とは推定又は断定しにくい程度にまで『型くずれ』しているか、乃至は社伝にいう『舞楽面』とは無関係に、全く別系統の仮面の変形であるかは明確にできない。本学研究紀要第7巻で前述した、異常に面長な仮面と比較して、2面が同じ神社に蔵されていることから、この仮面は *normal* な印象をうけるが、でんと坐った鼻、への字に結んだ口辺の表情など、何か引かれるところのある仮面である。

(4) 額について

顔面のほぼ正中線上にあたる部分を下凸部の中心として、左右へ *curve* を描いて、彫りの浅い3本の皺が刻まれている。上方より1本目の皺は *curve* の上凸部辺(左右眼のほぼ真上方)で消え、2本目は山なりの *curve* を描いて側頭部へ流れ、3本目の皺は眉の形体に沿って、眉端上方で終わっている。下凸部から外上方に引き上げられる *curve* を見ると、3本共右の方が全体に丸味を帯び、左はやや直線的に上凸部へ至っている。これは形体の観察上からみても、意識的に *asymmetry* の美的効果を狙ったというものではなくて、作者の手勝手がこのように左右の変化をつけさせたものであろう。なお頭頂附近・仮面周縁、その他に点々と虫害がある。

(5) 眉について

額より約8mm・隆起して、かなり太く遅しい三カ月形の眉が、刻出されている。ここでも額の皺と同じく、右に比較して左眉の *curve* は、眉頭から外上方にやや直線的に引かれている。眉の前部は左右とも虫害がひどく、もとの形体を観察することはできない。或はしぎ(鑷)だったのかも知れない。右眉は眉端が7~8mm、ほぼ垂直に切り下げられており、左眉は浅い溝が眉端から約30mm、延長して外下方へのびている。この左右

眉端の変化は、作者がどのような美的表現効果を意図したのか、判然としないが、或は面打ち時のなり行き上、そうなったのかも知れないと考えるのは、目その他との関係に於て、この左右の変化が、著しい美的効果をあげているとも思われないからである。

(6) 眼辺について

目はかなりの丸味をもって斜前下方に突出し、眼もその中で斜前下方に向けて彫られている。目全体の球面は右目の方がややふくらみが強く、上眼瞼・下眼瞼による輪郭は、右目はやや細長く、左目の方が丸味を持っている。視線の方向も右はやや外方を、左は内方を指している。左目の上眼瞼・下眼瞼は、顔面全体の中でしぎ(鑷)だった印象を受ける。右目は虫害の為上眼瞼の外眼角寄り³は形体不明である。眼のめぐり方も虫害の為、現状では無惨にえぐられたという印象を受けるが、他の箇所からみて、当初はこのようではなかったであろう。左眼は左右径に比して上下径が長く、現状では下方は下眼瞼を切っている。当初よりこのようであったのか、或は虫害の結果このようになったのか、その辺は不明である。

(7) 頬について

1本の皺が浅い溝を作って、左右外眼角下方から、左右口角辺にかけて頬に刻まれている。左頬のは下半分が大きいS字形の *curve* を持ち右頬のは少し不器用な逆S字形である。左右頬とも鼻翼から斜外下方にかけて、下方に平面的にそがれている。ここで頬のふくらみが除かれている為、への字形の口辺の表情をより厳しくするのに効果を出していると考えられる。右側のそぎ方に対し、左側はいくらか丸味をもっているのはどうしたことだろうか。

(8) 鼻について

鼻翼間の最大巾63mm。この鼻は、顔面の中心にでんと坐っていて、この仮面の大きな *point* である。鼻尖は仮面仰置の水平面より119mm。の高さで、決して高いという鼻ではない。正中線で分けて左右の鼻翼を比較すると、右の方が左より少し大きくふくらみを持ち、鼻翼を巡る頬との間の浅い溝は、かなり鋭くしぎ(鑷)立っており、鼻の存在する表現効果を助けている。鼻尖附近は少し磨滅しているが、初めからそう尖った鼻であったとは思われない。鼻孔は左右殆ど同じ大きさに彫られているが、技法等は虫害の為不明である。

鼻根部にあるU字形の突起は、鼻根筋(M.Procerus)の作用によりできた皺の表現であろうが、その *curve* は左右眉頭に接続し、額の皺と同様のくり返しの *rhythm* をここでしめくくっている。U字形の *curve* も額の皺と同様に、左がやや直線的である。なおU字形突

八幡竈門神社の仮面について(2)

起の中程に、上下に一段段をつけて皺が刻まれているようであるが、これも虫害の為判然としない。恐らくこの突起の形体・位置・大きさ等からおして、ここに accent としての皺が必要であったであろう。

(9) 口辺について

鼻下面・上唇間は約 8 mm. で、側面から見ると上唇・下唇はほぼ同一水平面上にある。上唇結節は富士山形の curve をゆったりと描き、下唇は明確な形で表現されていない。漸次消失するように刻まれた口裂の末端を、左右口角と仮定すると、左右口角間巾は約 75 mm. で、左に比して右が下っている。ゆるい山なりの頤唇溝の curve が下唇下方に刻まれ、末端は仮想される口角のほぼ下方で終わっている。この上唇結節と頤唇溝にはさまれた下唇は、輪部が明確な形で表現されていない為、かえって観者の想像の中で逞しく生かされて来るように思われる。よく dessin で上下 2 本の線で表現された口唇が、何か soft な、或は強固な、余韻のようなものをもっているのに似た表現と考えるのはどうであろうか。頤唇溝の左右の間隔は約 70 mm. で、右口角が左のそれより下っているのに対し、ここでは左下りになっている。正中線で左右に分けて観察すると、額の皺の curve、眉の curve、目の形体、鼻翼の大きさ、そして上唇結節・頤唇溝の curve の関係等、悉く asymmetry に表現されているが、それ程強烈な効果を出しているとも思われないので、意識的に美的効果を表現したというより、恐らく無意識のうちに面打ちの過程の中で、このようになったと考えるべきではあるまいか。口裂の末端は、頬の S 字形の皺の末端にほぼ接している。

(10) 顎について

特別にとりたてて述べる特長はないが、頤端に下方に向いて、約 3 mm. 間隔に 11 箇の植毛の穴が、齒列と同じ方向に彫られており、麻らしい植毛の残存がある。右端のはかなり多く残存しているが、現状では旧状を想像することはできない。もしこの植毛を復元できたら、この仮面の表情はかなり変化するであろう。

(11) 裏面について

仮面の厚みは 3~8 mm. で、部分によっては持てば折れそうな感じすらする。虫害の為か全体ささくれだった感じで、鑿の touch を殆んどみることができない。着面するとぴったりと顔面につく部分的な汚損などから推察してかなり着面使用されたのではないだろうか。右眼外方に上下に竈門八幡宮と判読できる墨書銘があり、左眼外方にも上下に 7~8 字の年号らしい墨書銘があるが、肉眼では判読できない。もし判読できればこの仮面の製作年代、或は作者等を知る貴重な資料になるかも知れず残念である。

(12) 紐孔について

左右とも頭頂より約 80 mm. の位置に径 5 mm. 位の紐孔がある。この紐孔とは別に頭頂より約 20 mm. 位下った側頭部に左右とも孔があり、現在植毛と同質の紐が通されており、右方は先端がかなり大きく結ばれているが、その目的が何であったか、ここでは調査・研究が不十分であるので不明である。

(13) 結語

本学研究紀要第 7 巻で発表した八幡竈門神社蔵の面長の仮面に続いて、同神社蔵のこの仮面をとりあげたのは、遅々としてはあるが、郷土の仮面の人体美学的研究の基礎資料とする為である。この仮面も社伝では『舞楽面』としているが、たとえこの仮面が正当な舞楽面などとはおよそかけ離れた造形であるとしても、ここまで変遷・移行し、或はこの地方の土俗面として、分散・普遍しながら変形して行く過程の 1 作例として、貴重な位置づけとなる遺品であるかも知れない。

郷土のこの種の仮面を観察・集約・比較分析して検討を加えて行くなれば、郷土大分県の仮面の系譜ができるのではないかと考えられる。

なお、研究途上に於て起る民俗学的或はその他の諸問題については、専門外のことも多いので諸賢の御教示をお願いする次第である。

後記

遅々とした歩みの仮面研究に、御多用の中懇切に御指導いただいた恩師西田正秋先生と、今回の研究にも心よく御支援くださった宮司・矢黒学氏御一家に厚く感謝する次第である。

訂正

本学研究紀要第 5 巻に発表した浮嶋八幡の仮面について、後日観察の結果、彩色跡らしいものが見られるので、同研究紀要 P.60 の上より 9 行目(g) 彩色なしとあるのを、彩色ありと訂正しておく。

IV 参考文献

- 西田正秋著 美術解剖学論攷
- 同上 顔の形態美
- 中村保雄著 能の面
- 岡嶋敬治著 岡嶋解剖学
- 金子良運著 仮面の美
- 志手環編 豊後速見郡史
- 小野一郎著 八幡竈門神社の仮面について(大分県立芸術短期大学・研究紀要第 7 巻)

Tab. I

八幡竈門神社蔵仮面・寸法・計測・一覧表

小 野 一 郎 計測

図 版 (Fig.)	付 号	仮 面 部 位	mm	備 考
Fig. 7	a b	仮面上下径	232	
"	c d	" 最大左右径	152	
"	e f	右目左右径	58	
"	g h	" 上下径	26	
"	i j	左目左右径	55	
"	k l	" 上下径	27	
"	m n	右 眼球左右径	14	
"	o p	" 上下径	15	
"	m' n'	左眼球左右径	14	
"	o' p'	" 上下径	18	
"	q r	鼻 巾	63	両鼻翼間最大巾
"	s t	口 巾	73	左右口角外端間
Fig. 8	a h	前 額 高	109	仮面仰置の水平面よりの高さ
"	c d	鼻根部高	107	"
"	e f	眼 球 高	104	"
"	g h	鼻 高	119	"
"	i j	上 唇 高	98	"
"	k l	頤 端 高	87	"

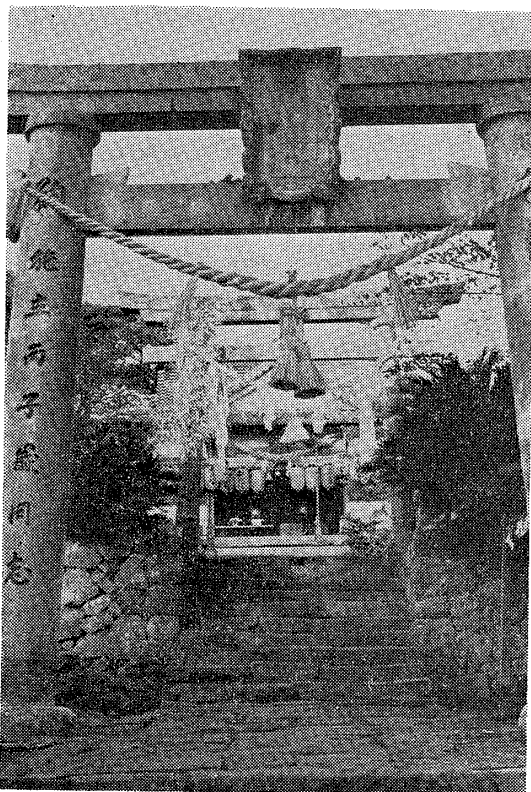


Fig. 1 八幡竈門神社正面景観

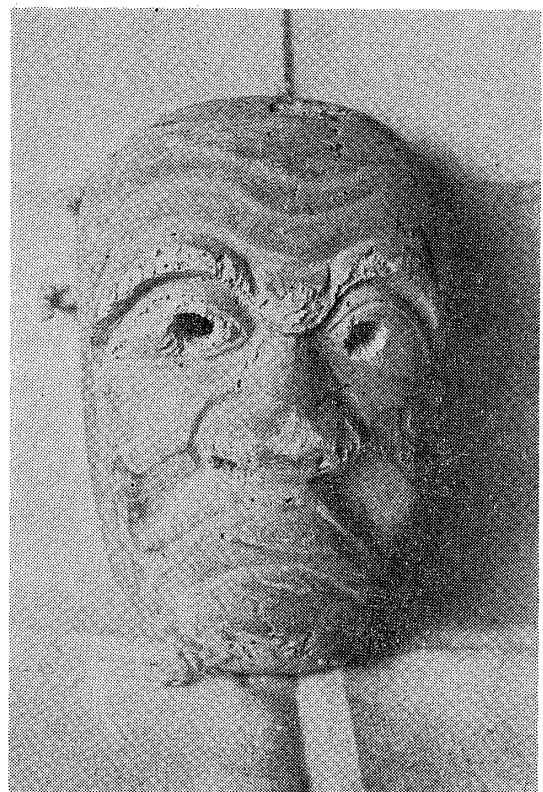


Fig. 2 仮面・前面

八幡竈門神社の仮面について(2)



Fig. 3 仮面・右側面



Fig. 4 仮面・左側面



Fig. 5 仮面・左斜側面



Fig. 6 仮面・裏面

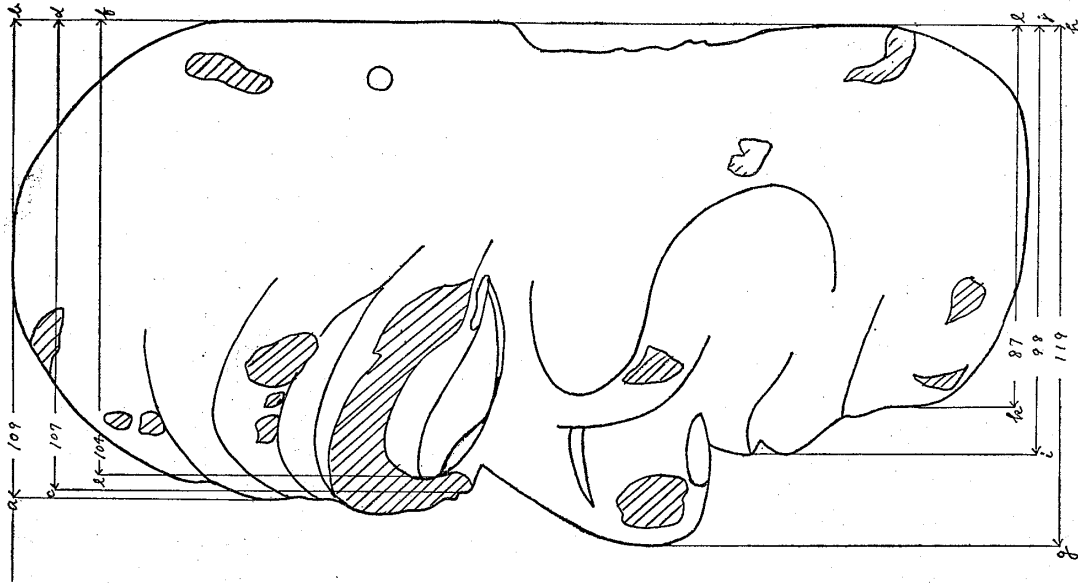


Fig. 8 仮面・左側面図 原図美物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$
小野一郎 原図

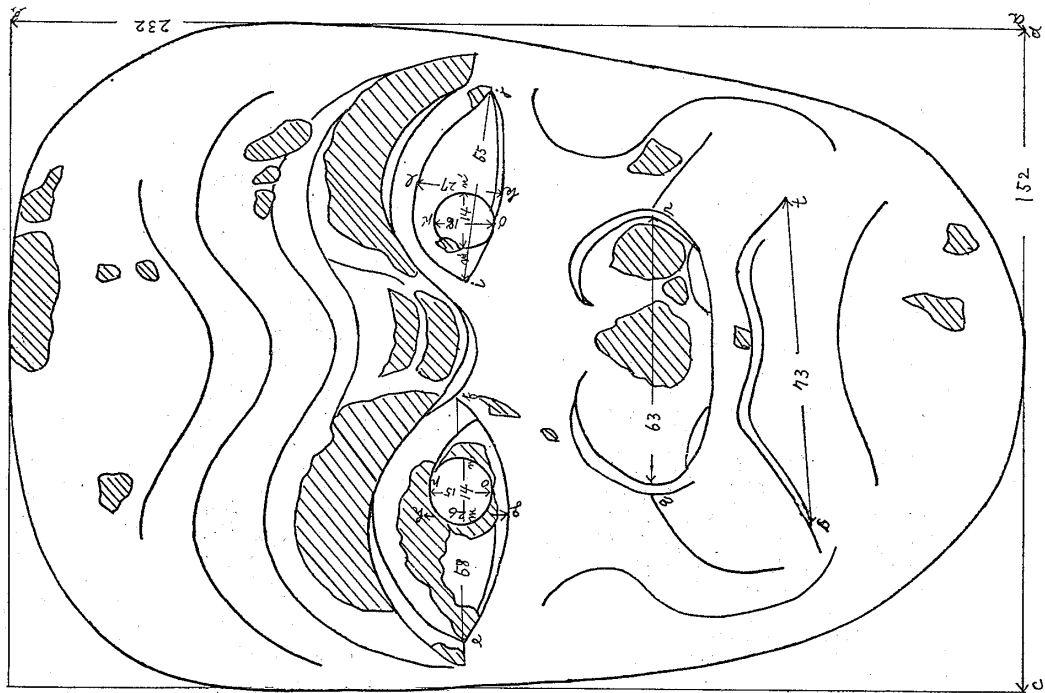


Fig. 7 仮面・前面図 原図美物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$
凡例 ● 剝脱部分 小野一郎 原図